

## 平泉町花立Ⅱ遺跡出土の瓦について（その2）

鎌田 勉

岩手県立博物館 020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷 34 Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan.

本稿（その2）では、花立Ⅱ遺跡の瓦と平安京とその周辺部出土の中期から後期とされる瓦を比較検討しながら、花立Ⅱ遺跡の瓦の系譜と年代を推測する。さらに、花立Ⅱ遺跡出土瓦の製作者及び瓦使用の建物の性格を可能な限り検討してみる。

### 1 はじめに 瓦の系譜と年代の検討について

平安時代後期になると、城柵等の廃絶もあり官衙や豪族居館、寺院等に伴う瓦は、平泉を除けば陸奥国内、出羽国内ではほとんど出土しない。11~12世紀、瓦の消費地も生産地も平泉以外の地域では確認されていない。奥州藤原氏の当時の勢力圏（陸奥国・出羽国）以外の地域でも、瓦の消費地に関しては、平安京とその周辺部を除けば非常に限定的である。この時代、平安京へ瓦を供給するために、山城・播磨・讃岐・丹波・河内・尾張・南都（大和）等の各地域で活発な生産活動が行われた。生産地（国）内での瓦の需要はあったとしても、主要な消費地は平安京と周辺地域であり、例外的に12世紀代の博多・平泉・神戸・宮島・鎌倉・常陸等が存在した。平泉以外では、対外貿易の拠点で中国風の瓦を用いた博多、平清盛の拠点福原と巖島神社、鎌倉幕府に関係する寺院等であり、瓦を使用することの意味のある場所（政治や宗教等の権力を背景とする場所）に限定されていたと考えられる。

陸奥国北部において、瓦の使用は9世紀後半に胆沢城跡・明後沢遺跡で始まり、胆沢城跡北方2kmの瀬谷子瓦窯跡群で瓦が生産された。その後は国見山廃寺跡や泥田廃寺跡、白山廃寺跡等の10~12世紀の寺院の屋根に葺かれた程度であるが、生産を行った瓦窯は不明である。国見山廃寺跡の軒丸瓦は胆沢城系の瓦なので瀬谷子瓦窯跡群の製品の可能性があるが、白山廃寺跡・泥田廃寺跡については出土量も多くないことから購入品の可能性がある。小野寺2002は、国見山廃寺跡の瓦の年代を10世紀前半と推測している。白山廃寺跡等の瓦が購入品とすれば、陸奥国北部においては

瓦の生産活動は10世紀前半までには廃絶し、技術的な伝統は途絶えたと考えられることができる。矢崎1964・鎌田1994で述べるように、瓦は12世紀平泉に突如として出現したものである。

花立Ⅱ遺跡の瓦は、瓦生産地からの購入か、瓦工人による現地生産かの2つの可能性が考えられる。出土量が多く遠隔地であること、瓦の胎土・焼成、窯跡等の生産遺跡の存在（巴文・剣頭文系の瓦窯跡）から、平安京を主な消費地としたある特定の地域の瓦窯の工人による出張製作と考えられる〔註1〕。

11~12世紀、たび重なる平安宮修造・再建や活発化した造寺・造御所活動により、各地で生産された瓦が平安京に集められた。平安京は瓦の見本市であり、文献資料を参考に絶対年代を推測することも可能である。中国系の瓦が用いられた博多の瓦は例外として、平清盛に関わる福原（祇園遺跡）の瓦は隣国である播磨産か、福原遷都の際に山城や讃岐から運ばれた瓦（山城産・讃岐産等）であり、鎌倉幕府と関連する瓦は、平泉・柳之御所遺跡と同じ山城系の巴文・剣頭文の瓦である。当時、全国各地の瓦は平安京の瓦の影響下にあり、平安京出土の瓦との比較は必須要件ともいえる。

11~12世紀、平安京に搬入された瓦の生産拠点となったのは、山城・丹波・讃岐・播磨を中心とする瓦窯群であった。山城には平安前期から洛北幡枝地区を中心に官窯系の瓦窯が存在していた。木工寮や修理職に属する瓦屋（造瓦所）を、上原真人氏は中央官衙系瓦屋と称する。11世紀は太秦地区の森ヶ東瓦窯を中心に操業が行われ、12世紀前半には六勝寺・鳥羽離宮などの造営を契機に生産が活発化し、栗栖野・南ノ庄田・西幡枝瓦窯などを中心とした洛北幡枝地区に生産の中心が移った。山城系の瓦屋は12世紀後半も引き続き操業するが、12世紀末には急激に縮小し操業を停止する。丹波では、11世紀後葉には六勝寺などの造営を契機に生産が活発化する。その後次第に低下し、12世紀中葉には操業を停止する。讃岐では、11世紀後葉

以降、鳥羽離宮の造営に伴い操業が活発化する。讃岐では国分寺・国分尼寺が営まれた十瓶山山麓から綾歌郡綾南町一帯にかけて瓦窯跡が分布しており、総称して十瓶山古窯跡群と呼ばれる。播磨では、11世紀後葉には、法勝寺などの造営を契機に瓦生産が始まり、12世紀に入ると六勝寺の造営を契機として三木・神出窯で生産が活発化する。12世紀中葉には魚住・魚橋・三本松窯でも生産が始まり、12世紀後半には次第に衰退し生産を停止する〔註2〕。

瓦の製作技法や瓦当文様は各生産地により独自の特徴がみられ、特に軒平瓦の瓦当部の成形技法は出土瓦の産地や年代の有力な判別方法となっている。山城では、11世紀代には平瓦端部凸部に粘土を補足して成形するが、12世紀前葉に平瓦端部を延ばした後に顎部に粘土を補足する「半折曲技法」が出現し、12世紀中葉には平瓦端部を折り曲げ、瓦当部を成形する「折曲技法」が出現し12世紀後葉に主流となる。丹波では、11世紀代粘土板を平瓦一枚造りの凸型台上に置き、広端部凸面側に瓦当部用の別粘土を貼り付けて瓦当部を成形し、瓦範を押捺する「接合技法」を採用していた。12世紀前葉になると、平瓦端部を折り曲げ瓦当裏面を叩く「折曲技法」が一般化する。讃岐では、軒平瓦の瓦当部は折り曲げや包み込みではなく、平瓦端部を厚くすることで瓦当部を成形し、瓦範を押捺する「一本造技法」が採用された。播磨では、11世紀代は接合技法で、12世紀前葉に「包込技法」が出現し、12世紀後葉に折曲技法が出現する。包込技法とは、平瓦とは別に瓦当部用の粘土塊を準備して瓦当部用の粘土塊を瓦範に押し付け、裏面に指先で溝を付し、そこに平瓦広端部を差し込んで接合するという特徴的な成形技法である。包込技法においては、瓦当部と平瓦との接合部や顎部、側面はナデ調整が行われ、瓦当部調整で一般的なヘラ削りの技法はほとんど存在しない。

以上、代表的な生産地の特徴を述べたが、（その1）で述べた花立Ⅱ遺跡の軒丸瓦Ⅰ～Ⅱ、軒平瓦Ⅰ～Ⅲについて順次検討を行うこととする。

## 2 軒丸瓦Ⅰ：素弁八葉蓮華文軒丸瓦について

### （1）瓦当文様について

軒丸瓦Ⅰとした素弁八葉蓮華文軒丸瓦について、瓦当文様が一致する瓦は平安京とその周辺部では発見されていない。類似する瓦は、太秦地区の発掘調査で発見された森ヶ東瓦窯跡出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が

ある（第1図-1）。花菱形の中房を4分して、1+4の蓮子を配し各蓮子を凸線で結んでおり、その周囲に短い花卉を配している。同範の瓦は北野廃寺跡でも出土している（第1図-2）。この花卉（単弁蓮華文）は先端が尖った宝珠形を呈しており、軒丸瓦Ⅰの蓮華文に文様の最も近いものと考えられる〔註3〕。

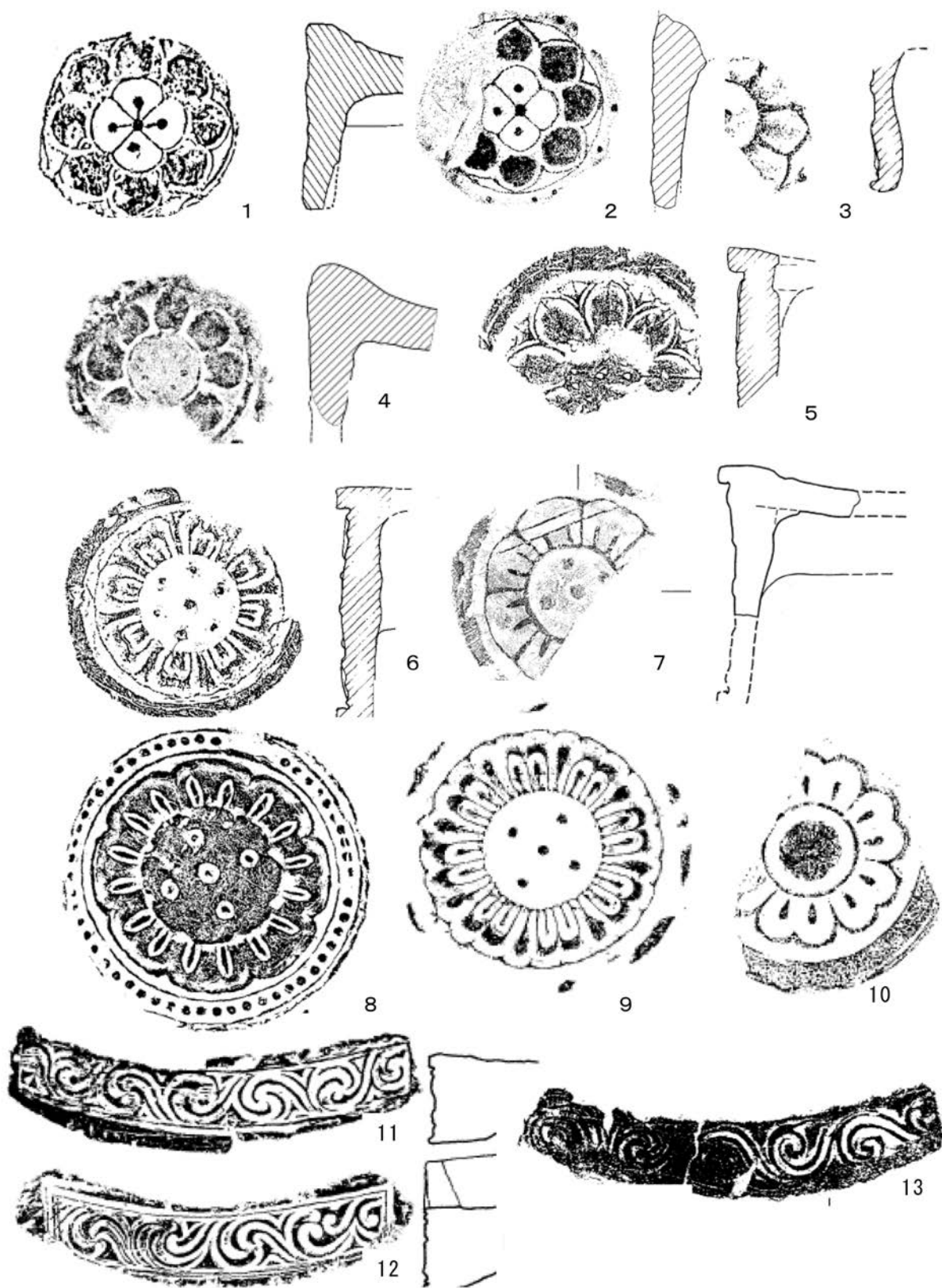
森ヶ東瓦窯跡は平安中期の瓦窯跡とみられ、この瓦窯の製品は平安宮や平安京・寺院をはじめ、滋賀県や大阪府内の遺跡でも発見されている。森ヶ東瓦窯跡の所在は、遺跡立会い調査でロストル式平窯の燃焼室と焼成部の一部が確認されたことによる（京都市埋文1988）。「下」文字を有する瓦が含まれることから、木村捷三郎氏は「下瓦屋」と呼称する。隣接地の発掘調査で安井西裏瓦窯跡が発見されているが、同範の瓦が出土することから森ヶ東瓦窯跡と一体的な瓦窯群を形成していたと推測されている（京都市埋文1999）。

森ヶ東瓦窯跡の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、藤原道長が造営した法成寺跡でも出土している。このことから、単弁八葉蓮華文軒丸瓦の実年代について、上原2001は藤原道長の法成寺創建瓦（1022年供養）としている。ただし、天喜六年（1058）法成寺全焼後、藤原頼通による再建所用瓦の可能性も考えられる。同様の瓦は頼通造営の高陽院跡や法勝寺跡（白河別業跡）でも出土することから、11世紀中葉までの使用時期を考えることができる。中房部が無文で花卉も表現が簡略化している軒丸瓦Ⅰは、様式的に11世紀中葉よりも年代が新しいといえる。

宝珠状に花卉の先が尖る瓦当文様という点では、木村捷三郎コレクションの平安宮260・261がある。「大内裡趾」出土ということだが、凸線で花卉が描かれている点で共通点がある。この瓦は灰色・軟質で平安後期、山城産とされている。平成16年度に調査された小野瓦窯産の軒丸瓦Ⅰは中房が小さいが、花卉が凸線で宝珠状に描かれている。森ヶ東瓦窯跡系の瓦は、左京二条二坊十町跡でも出土し（第1図-4）、先端が尖った花卉は尊勝寺跡等でも出土している（第1図-3・5）。概観すれば花卉が宝珠状に表現される瓦当文様は、山城系の瓦に多く認められるようである。

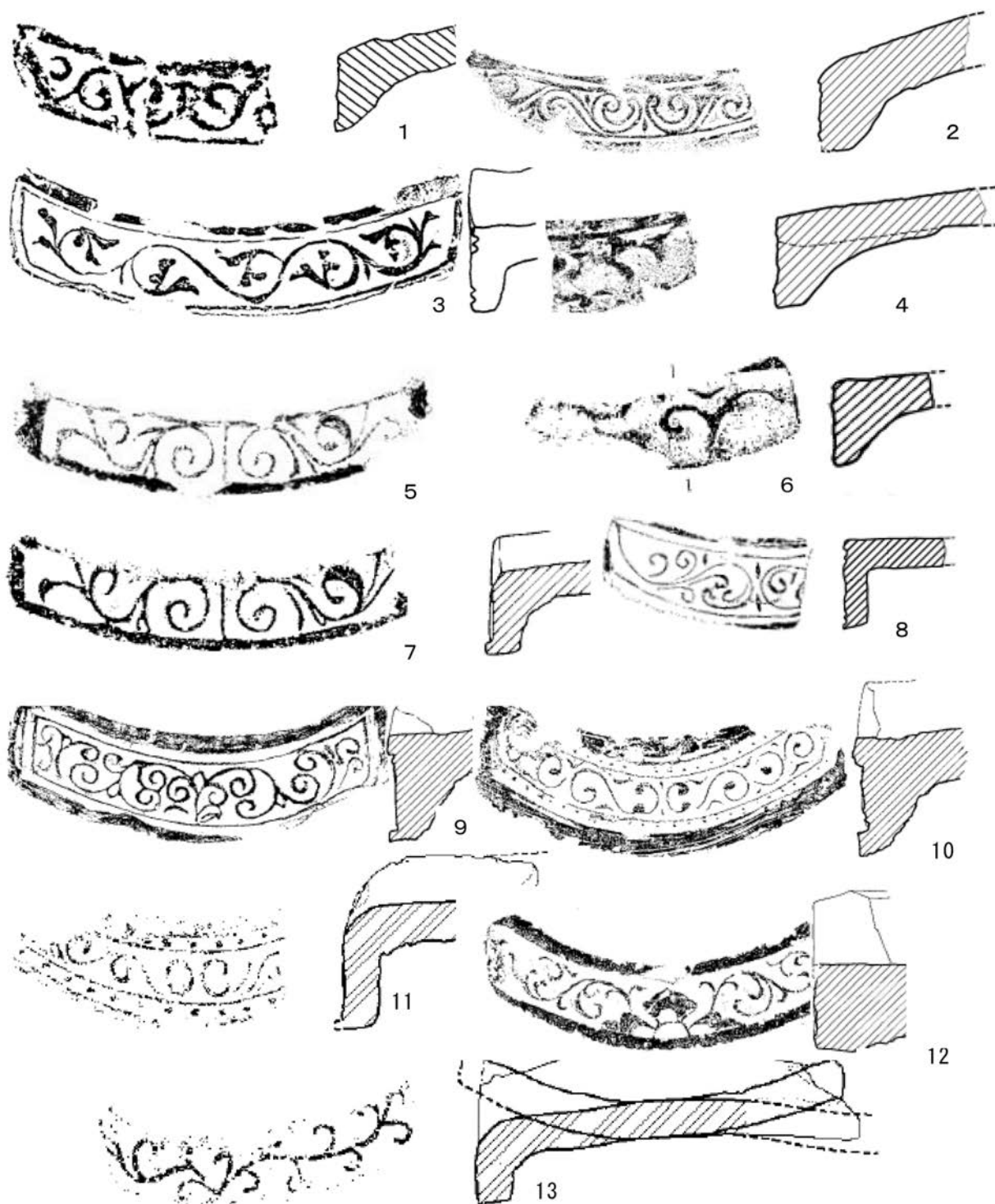
### （2）接合式の技法について

軒丸瓦ⅠとⅡは、瓦当部と丸瓦部を接合する「接合式」による成形技法を採用している。飛鳥時代以降、軒丸瓦は瓦当部と丸瓦部を接合する接合式が一般的であったが、承和元年（834）の応天門の修復所用瓦に「一



第1図

1. 森ヶ東瓦窯跡(京都市埋文1988) 2. 北野廃寺跡(京都市埋文1983) 3. 尊勝寺跡(京都市埋文1991) 4. 平安京左京二条二坊十町跡(京都市埋文2005) 5・6. 尊勝寺跡(京都市埋文1991) 7. 法勝寺跡(美濃口他2011)  
 8. 尊勝寺跡(杉山・岡田1961) 9. 尊勝寺跡(京都市埋文1995) 10. 鳥羽離宮跡第127次調査(京都市埋文1993)  
 11. 鳥羽離宮南殿跡(上原2001) 12. 讚岐龍燈院(上原2001) 13. 花立Ⅱ遺跡軒平瓦Ⅰ(左右反転)  
 ※縮尺はそれぞれ任意(1/3~1/4程度)



第2図

1. 仁和寺院家跡（京都市埋文 1989） 2・4. 平安京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡（京都市埋文 2008） 3. 尊勝寺跡（杉山・岡田 1961） 5. 延勝寺・岡崎遺跡（京都市埋文 1998） 6. 尊勝寺跡（京都市埋文 1987） 7. 尊勝寺跡（京都市埋文 1989） 8. 延勝寺跡・岡崎遺跡（京都市埋文 2014） 9・10・12. 最勝寺跡・岡崎遺跡（京都市埋文 1995-2） 11・13. 白河街区跡・岡崎遺跡（京都市埋文 2005） ※縮尺はそれぞれ任意（1/3～1/4程度）

本造」の軒丸瓦が出現し、山城幡枝系の瓦窯群を中心に盛行する（近藤 1985）。その後、11世紀初頭に「接合式」が出現し、11世紀以降、一本造と接合式は並行して生産されるようになった。花立Ⅱ遺跡の軒丸瓦には、11世紀以降の山城系の「接合式」の影響が考えられる。

植山 1990 は、12世紀初頭の山城系瓦の大きな変化は、軒丸瓦の一本造の技法が用いられなくなることにしている。高陽院跡・法勝寺跡では一本造が存在するものの、11世紀後半以降の多くの軒丸瓦には一本造の技法はみられなくなる。森ヶ東瓦窯跡系の軒丸瓦は接合式のみであり、12世紀初頭の瓦の多くに森ヶ東瓦窯跡系の造瓦技法が見られるとしている。森ヶ東瓦窯跡から始まった接合式という造瓦技法の改変が、11世紀代に山城系瓦屋に影響を与えていったものと思われる〔註4〕。接合式を採用した花立Ⅱ遺跡の軒丸瓦は、接合式に変化していった山城系の瓦屋の軒丸瓦成形技法に類似するものと考えられることができる。

平安中期の瓦は木工寮や修理職に属する瓦屋で生産され、これら造瓦所はいわゆる官窯として生産活動を行ってきた。前田 2007 は、官窯として『延喜式』「木工寮車載条」にみられる栗栖野瓦屋・小野瓦屋と、地名から転化した河上瓦屋、修理職に属した池田瓦屋を挙げ、官窯に関連する京都近郊の瓦窯として大宮北山ノ前瓦窯と森ヶ東瓦窯を挙げている。森ヶ東瓦窯跡は平安京西端に位置する瓦窯であるが、洛北の幡枝官窯群と関連する瓦窯と認識されている。

森ヶ東瓦窯跡の軒丸瓦の特徴は、接合式であることに加え、瓦当面に離れ砂が顕著なこと、胎土は砂の混入少なく細かい縞模様を呈すること、焼成は青灰色を呈し堅緻なものと、かなり軟質焼成のものに分かれることが挙げられる。森ヶ東瓦窯跡の操業年代は、10世紀中葉から11世紀前半とされているが、前述のように12世紀初頭の山城系の瓦の多くに森ヶ東瓦窯系の造瓦技法が見られる。12世紀初頭の事例として、植山 1990 は左京三条四坊四町跡（高倉宮跡）の瓦を挙げている。

花立Ⅱ遺跡の軒丸瓦Ⅰと森ヶ東瓦窯跡の単弁八葉蓮華文軒丸瓦とは、瓦当文様と接合式という点で類似性がみられる。操業年代が問題であるが、技術的な系譜という点で12世紀初頭までの幅で考えることができるならば、軒丸瓦Ⅰは森ヶ東瓦窯跡の系譜を引く瓦の一つということができる。

### 3 軒丸瓦Ⅱ：複弁八葉蓮華文軒丸瓦について

#### （1）瓦当文様について

軒丸瓦Ⅱの瓦当面は推定径が約17cmで、軒丸瓦Ⅰの推定径19.3cmよりもひと回り小さいが、無文とみられる中房の径は共有するものであり、中房径はほぼ同一とみなすこととする。軒丸瓦Ⅰとの文様面での違いは、素弁か複弁かという以外に、陰刻か陽刻かの違いでもある。陰刻の複弁蓮華文は文様自体は比較的普遍的に存在する。陰刻表現では尊勝寺跡出土の瓦（第1図-6・9）や、簡略化された文様の法勝寺跡出土の瓦（第1図-7）等がある。

飛鳥時代以降、複弁蓮華文の軒丸瓦は川原寺式軒瓦と呼ばれ、瓦当文様の典型として時代を越えて流行した。その中で中房の蓮子等が省略される例は、12世紀前半の播磨産の軒丸瓦に見られる特徴であり、鳥羽離宮跡、特に金剛心院跡の半数を占めるタイプである（第1図-10）。ただし、複弁の花弁は6個である。金剛心院は仁平三年（1152）10月18日に供養されている。本来8個である花弁が6個に変化するの、12世紀代の軒瓦の小型化に伴うものと推定される。さらに、径が小さくなった中房には蓮子ではなく三巴文等が配されることが多くなる。創建当初、木瓦葺きであった平等院鳳凰堂は12世紀初頭に本瓦葺きに変更されたが、その際に用いられた河内向山産の複弁六葉蓮華文軒丸瓦の中房には巴文が配されている。河内向山系の中房の巴文は、12世紀代に隆盛する巴文系軒丸瓦の先駆けとなったと考えられている。花立Ⅱ遺跡の軒丸瓦は、小型化する六単位の花弁以前の瓦であり、中房部が巴文が配される前の瓦であると考えられることができる。

#### （2）瓦当面の径について

推定径約17cmの軒丸瓦Ⅱは、11世紀後半の平安京出土の軒丸瓦とほぼ同じサイズであるが、径19.3cmほどの軒丸瓦Ⅰは、標準よりひと回り大きな瓦である。12世紀に入ると軒丸瓦は小型化する傾向があり、特に山城産の軒丸瓦は径が12~13cm程度になる。瓦当面の径からみれば、花立Ⅱ遺跡の軒丸瓦は、11世紀後半までの（小型化以前の瓦の）特徴をもつといえるだろう。

瓦当面径が20cm前後の軒丸瓦は、数は多くないものの六勝寺跡での出土例がある。例えば、木村コレクションにある勸業館513と法勝寺387が20cmを越えている（木村 1996）。勸業館は尊勝寺跡の南側に位置

しており六勝寺系の瓦といえる。さらに大きな瓦は杉山・岡田 1961 の尊勝寺跡出土瓦であり、径が約 23cm である（第 1 図-8）。

瓦当面の径の大きな軒丸瓦は単純に見栄えが良いが、組み合わされる軒平瓦によりバランスが悪くなる恐れがある。六勝寺系の瓦に大型の軒丸瓦がみられるのは、天皇の御願寺という性格や用いられた建物の性質等の要因が関係するのかもしれない。軒平瓦は元となる平瓦の大きさに規制されるが、接合式の軒丸瓦は、元となる丸瓦よりもひと回り大きく成形することは可能である。軒丸瓦Ⅰと軒丸瓦Ⅱは径の大きさは異なるものの、出土状況からみて同じ建物に用いられた可能性がある。正面や出入口に軒丸瓦Ⅰが用いられたともいえるが、瓦を発注した者が、六勝寺系の少し大ぶりの瓦を求めた結果なのかもしれない。

#### 4 軒平瓦Ⅰ：偏行唐草文軒平瓦について

##### （1）瓦当文様について

軒平瓦Ⅰの偏行唐草文の文様に近いものは、上原 2001 が指摘するとおり、鳥羽離宮南殿跡出土の偏行唐草文軒平瓦だと思われる（第 1 図-11）。鳥羽離宮南殿は、応徳三年（1086）に白河上皇が鳥羽の地に寄進を受けた別業に造営した後院で、讃岐守高階泰仲が造進したものとされる。この南殿跡出土瓦も讃岐産であり、『扶桑略記』に記される讃岐守高階泰仲による鳥羽南殿への讃岐産瓦の搬入と関連付けて考えることができる〔註5〕。

上原 2001 によれば、軒平瓦Ⅰのような陽刻と陰刻が混在する様相は、讃岐龍燈院跡出土の軒平瓦に類似するとのことである（第 1 図-12）。軒平瓦Ⅰと讃岐産瓦の唐草文の方向が違うので、方向が合うように軒平瓦Ⅰの文様を左右反転させてみた（第 1 図-13）。二重の唐草文が巻き込む様子はよく似ているが、鳥羽離宮南殿跡出土瓦がつる草よりも巻きの方が強調され、三巴文に近い様相を呈している。文様的には軒平瓦Ⅰが讃岐産瓦のモデルになったように見受けられ、讃岐産瓦の方が後発的であると考えられる。

偏行唐草文系の軒平瓦は、11 世紀代の山城産軒平瓦によくみられる文様である。植山 1990 が紹介している森ヶ東瓦窯跡産の軒平瓦（植山 1990 - 第 1 図 10）は、陽刻表現でつる草が細く描かれている。文様的に似ているわけではないが、軒平瓦Ⅰの偏行唐草文の原形の可能性がある。ところで、上原 1980 は、山城系（中

央官衙系）のつる草状の偏行唐草文軒平瓦の変化について次のように述べている。

- ①次第に巻きが弱くなる（直線的になる）
- ②左右が逆転する（左行唐草文→右行唐草文→左行唐草文、凹凸が逆転する場合がある）
- ③立体感が喪失する

右行唐草文の軒平瓦Ⅰの文様は、11 世紀前半以降の山城系軒平瓦の変化の過程に位置する文様の可能性がある。平安京とその周辺部の偏行唐草文軒平瓦の出土事例をもう少しみてみたい。

偏行唐草文軒平瓦は六勝寺の一つである尊勝寺跡でも出土している（第 2 図-3）。つる草が明確に表現された丹波産の軒平瓦であり、瓦当部は折曲技法によるものである。杉山・岡田 1962 の報告によれば、尊勝寺跡の金堂・東回廊・東塔など伽藍中枢部の調査で、このタイプの偏行唐草文軒平瓦が 45 点出土しており、全体の約 1 割を占めるということである。同様の瓦は京都市埋蔵文化財研究所の昭和 63 年度調査でも出土している（京都市埋文 1993）。尊勝寺は堀河天皇の御願寺であり、康和四年（1102）に建立された寺院である。上原 2010 は、大型の複弁八葉蓮華文軒丸瓦と組み合せて創建尊勝寺金堂の軒先を飾った瓦と推測している。丹波産瓦が用いられたのは、金堂・講堂等を但馬守高階仲章が担当したが、当時 12 歳のため実質的に父丹波守高階為章が差配した結果と考えられている。為章は康和四年に死去しているので、限定的な年代の瓦ということができる。

平安後期の偏行唐草文軒平瓦は、平安京左京一条三坊でも出土している（京都市埋文 1996）。均整唐草文と偏行唐草文の中間的な文様の山城産の折曲技法による瓦である。昭和 61 年度に発掘調査された仁和寺院家跡（大聖院及び真光院跡）からも偏行唐草文軒平瓦が出土している（第 2 図-1、京都市埋文 1989）。単線だがやや太めの簡略化された唐草文であり、実測図等から判断すると指オサエ痕が顕著な半折曲技法の瓦と推測される。

二重の唐草文という意味では、平安京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡から出土した唐草文軒平瓦がある（第 2 図-2、京都市埋文 2008）。報告書によれば、備前国分寺でも同文の瓦が出土しており、備前から搬入された瓦ということである。平瓦端部凸面に粘土を付加して頸部を成形し、ヘラ削りで仕上げられており、山城産と成形技法が近似している。11 世紀から 12 世紀初

頭にかけて、偏行唐草文という軒平瓦の文様は、山城系瓦屋を中心に丹波・讃岐・備前等へ広がっていった可能性がある。

### (2) 瓦当部成形技法について

軒平瓦 I の瓦当部成形技法は、技術的な系譜や年代を推測するための有効な手掛かりとなるものである。軒平瓦 I の瓦当部側面を観察すると、平瓦と粘土貼り付け部分の境が明瞭に分かるひび割れが確認できる。一応、境目はヘラ削りで調整されているが、焼成時か経年劣化によりひび割れが目立ってきたものと思われる。瓦当部にする部分を指オサエにより薄く延ばして、粘土を貼り付けて顎部を成形している。この部分も指オサエで行っており、ヘラ削り調整の際に指オサエの痕跡を消そうという意図はみられない。このような軒平瓦 I の成形技法は、広い意味での半折曲技法と考えられる。

この半折曲技法は、山城系の軒平瓦固有の成形技法であり、柳之御所遺跡等の巴文・剣頭文系の半折曲技法・折曲技法の軒平瓦よりも一世代古い技法である。一方、上原 2001 は軒平瓦 I の瓦当部成形技法を「顎部指オサエ技法」としてしている。この技法は半折曲技法以前の、11 世紀代の山城産軒平瓦の特徴的な製作技法である。上原 2001 は、この技法の上限を 11 世紀第 2 四半期（藤原頼通の造作に関わる瓦）とし、下限を 11 世紀第 4 四半期（白河上皇の造作に関わる瓦）としている。

上原氏のいう顎部指オサエ技法は、凸型の一枚造成形台で指オサエにより瓦当部を成形する技法で、通常の平瓦よりも厚い平瓦（軒平瓦用の平瓦）で成形を行うものである。上原 2001 は 11 世紀第 2 四半期の事例として、法勝寺金堂東廊下層遺構（白河院、京都市埋文 1987）や平安京左京二条二坊（高陽院跡）を挙げ、11 世紀第 4 四半期の事例としては、法勝寺跡・鳥羽離宮南殿跡・三条西殿跡を挙げている。顎部指オサエ技法は、当初から軒平瓦製作用の厚手の粘土板を準備し、平瓦一枚造りの凹型成形台上で、主に指押しによって瓦当部を成形するが、そのため顎部から平瓦部凸部にかけて指頭圧痕が顕著となる。12 世紀以降は、平瓦と同じものから軒平瓦を造るようになるので、この技法は 11 世紀後半の山城系軒平瓦の大きな特徴とされる。

しかし、花立 II 遺跡の軒平瓦 I は事前に厚めの平瓦を準備して成形したようには見受けられない。強いていうならば、軒平瓦 I は、顎部指オサエ技法から本格

的な半折曲技法への過渡的な技法ということになるだろうか。上原 2001 は、11 世紀第 4 四半期になると顎部指オサエ技法の軒平瓦にも、半折曲げて瓦当部を成形する例が出現するとし、花立 II 遺跡の軒平瓦 I もこれに属するらしいとしており過渡的な製品であることを認めている。半折曲技法についてももう少し検討してみる。

### (3) 半折曲技法について

山城幡枝瓦窯群に属する南ノ庄田瓦窯跡の発掘調査では、軒丸瓦 24 種・軒平瓦 27 種が発見されている〔註 6〕。12 世紀中葉から後葉の瓦が主体であるが、一部に 12 世紀初頭の瓦が含まれている。報告書（京都市埋文 1998）では、軒平瓦の瓦当面が上下に分かれたものがあり、双方に比較的明瞭な剥離面を残すものが少なくなかったとし、平瓦部凸面に長く補足粘土が続く点を含め、半折曲技法と同じ特徴であることから「類半折曲技法」と呼称している。

南ノ庄田瓦窯跡の事例では、12 世紀初頭の半折曲技法において、顎貼り付けによる瓦当部成形がなされているということが分かる。同じ幡枝地区に所在する小野瓦窯跡（小野瓦屋）の製品の中に、11 世紀中葉から後半と推測される半折曲技法の瓦が存在する。法勝寺跡・岡崎遺跡出土の軒平瓦（京都市文化局 2005 - 図 32-56）である。始めに瓦当面からの指オサエから瓦当部を成形する。凸面に粘土を貼り付けて横方向のナデを行うが調整は最小限であり、指オサエの痕跡が顕著に残っている。

上村和直氏の御教示によれば、この瓦は半折曲技法の出現期の瓦であり、11 世紀第 3～4 四半期頃、少なくとも法勝寺創建前には出現していたとのことである。古い段階のため瓦当面の縦の長さが 5cm 程あり、その後次第に瓦当面の縦の長さが小さくなる傾向が考えられる。その他に、小野瓦窯跡出土の半折曲技法の軒平瓦（京都市文化局 2005 - 図 32-53）は、やはり 5cm 程の瓦当面の縦の長さだが、瓦当部は薄顎に成形され、顎下部が面取りされているものである。一見すると折曲技法の瓦であるが、瓦当部断面を観察すると指オサエにより瓦当部を成形した後に、顎部の粘土を補充していることが分かる。瓦当面からの指オサエにより粘土の移動が観察され、それにより顎部は平瓦部よりも薄くなっている。この瓦は、先の京都市文化局 2005 - 図 32-56 の瓦よりも型式的には新しいものと考えられる。

また、これも上村和直氏からの御教示であるが、山城系の半折曲技法の軒平瓦の特徴として、瓦当部上面に曲げじわによる凹みがみられるということである。曲げじわの痕跡は凸台で成形した際の布の端部に相当すると思われる。この痕跡を横ナデで消していることがあるが、貼り付け顎との識別のポイントとなるということである。小野瓦窯跡産の京都市文化局 2005 - 図 32-56・53 は、曲げじわの痕跡はなく半折曲技法の初期的な瓦であると考えられる。

平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡出土の軒平瓦（第2図-4、京都市埋文 2008）は、小野瓦窯跡産とみられている。顎部粘土貼付けによる顎部指オサエ技法による瓦であり、平安中期の山城系軒平瓦の特徴をもつ。やや段顎状を呈する断面形から見ても、花立Ⅱ遺跡の軒平瓦Ⅰの成形技法とは異なると考えられる。

顎貼付け（顎部指オサエ技法）から半折曲技法への変化は明確なものではない。どこまでが貼り付けで、どこからか半折曲げと判断することは意味のあることではない。山城幡枝地区の瓦屋で、少しずつ時間をかけて緩やかに変化していったもので、その変化は11世紀後半であり12世紀に入ると半折曲技法の瓦が主流となり古い型式は見られなくなるということではないだろうか。軒平瓦Ⅰの半折曲技法は、上原氏のいう顎部指オサエ技法の隆盛期よりは新しく、半折曲技法が主流となる時期よりも若干古い様相であり、11世紀第4四半期から12世紀初頭の山城系軒平瓦の特徴に類似すると推測する。

## 5 軒平瓦Ⅱ：均整宝相華唐草文軒平瓦について

### （1）瓦当文様について

花立Ⅱ遺跡の軒平瓦Ⅱの瓦当文様とよく似ている瓦は、山城産の均整唐草文軒平瓦と思われる（第2図-5・7）。尊勝寺跡や延勝寺跡・岡崎遺跡で出土している瓦であり、同様の瓦は平安宮跡会昌門推定地・真言院跡等でも出土している。昭和61年尊勝寺跡の発掘調査（京都市埋文 1989）で出土した瓦は、山城産で瓦当部成形は折曲技法によるものである。山城系の折曲技法であることから、12世紀中葉の尊勝寺修理時の瓦と考えられている。軒平瓦Ⅱの文様と比べると、尊勝寺跡等の均整唐草文はつる草の線が細く形式化していることから、花立Ⅱ遺跡の均整唐草文の方が古い要素をもつと考えられる。

均整唐草文系の軒平瓦で、尊勝寺跡等のような中央に垂線が入るタイプは平安京出土瓦の中では少数派である。垂線を考えないとすれば、文様に近いのは11世紀から12世紀前半の丹波産均整唐草文系の瓦だと思われる。特に、上原 2010 のいう「C字背向中心飾唐草文」のタイプは、法成寺跡で初めて用いられ、円宗寺跡・平安宮跡・法勝寺跡・円勝寺跡でも出土する。このタイプは、丹波系瓦屋で最も多数かつ長期にわたって製作された軒平瓦であり、平安宮や京周辺の寺院・離宮で広範に使用されたということである。C字背向中心飾唐草文と同じ文様の瓦は、山城系の軒平瓦では確認できないことから、丹波系瓦の特徴を顕著に示したものと見える。法勝寺跡阿弥陀堂所用瓦の中で、C字背向系の軒平瓦は16点（12%）であった。同じ阿弥陀堂所用瓦のうち、軒丸瓦で最も多く出土したのは山城産（栗栖野瓦屋産）の軒丸瓦であった。上原 2010 は、この山城産軒丸瓦と丹波産軒平瓦（C字背向）が組み合うならば、山城系と丹波系の分業が想定できるとしている。

文様の中に花文が含まれると判断し復元した軒平瓦Ⅱは、均整宝相華唐草文と推定している。もともと宝相華唐草文系の文様とは、花菱文を中心飾りとし、唐草文と花文を左右に反転させたもので、左右にのびた蕨手の先に三葉文がとりつくものである。均整宝相華文とされる軒平瓦は、平安後期の南都（大和）産瓦にいくつかみられ、双ヶ岡地区の常盤遺跡や仁和寺院家跡等で出土している。南都系瓦屋では、12世紀前半にこの種の瓦を生産しており、ほぼ同時期に尾張・播磨系瓦屋で採用されている。これらの文様には優美な宝相華文が描かれており、図案化の進んでいる軒平瓦Ⅱの文様との共通性はあまりみられないようである。

### （2）瓦当部成形技法について

軒平瓦Ⅱの瓦当部はいわゆる折曲技法による成形である。直角に折り曲げられているが、裏面に粘土を充填し調整を行っており、断面形だけみると鈍角に見える。折曲技法といえば、12世紀中葉の山城系軒丸瓦の成形技法であるが、軒平瓦Ⅱの成形技法は丹波産軒平瓦の折曲技法に類似している。

上原 2001 も、軒平瓦Ⅱの成形技法は丹波産軒平瓦の折曲技法に類似すると述べている。丹波系折曲技法の特徴としては、上原 2010 は、①凸型台上に敷いた布端に巻き込むように平瓦部広端部を折り曲げる手法が未発達であること、②瓦当角が直角にならないこと、



③布目が瓦当面に連続するものは若干あること、④技法的に稚拙で定型化せず、浅顎から薄顎、半折曲と折曲が同一文様で混在することとしている。軒平瓦Ⅱが丹波系折曲技法を受け入れているとすれば、年代をある程度絞り込むことは可能であると考えられる。

上原 2001 は、康和四年（1102）の尊勝寺創建瓦において、丹波産軒平瓦で折曲技法が半数以上を占めることから、12世紀初頭には丹波系瓦屋では折曲技法が一般化していたと推測している。また、上原 2010 は、折曲技法（薄顎）の初現について、法勝寺阿弥陀堂所用瓦とし、さらに平安宮朝堂院出土の丹波系軒平瓦に関連させて1060年代の終わり頃と推測している〔註7〕。

花立Ⅱ遺跡の軒平瓦Ⅱの折曲技法に類似する瓦を少しみていこう。まず、「最勝寺跡」から出土した丹波産の均整宝相華唐草文軒平瓦がある。京都市埋文 1995-2で最勝寺跡・岡崎遺跡出土として報告されている瓦である（第2図-9・10・12）。法勝寺跡西側の岡崎グランド東側の駐車場工事に伴う調査で出土した瓦である。検出遺構は自然流路のみで、最勝寺の痕跡は見られなかったことから、法勝寺に關係する瓦であり位置的にみると（伽藍想定図との比較によると）五大堂所用瓦の可能性はある。

第2図-9の瓦は、瓦当部折り曲げ後に瓦当部裏面に粘土が充填され面取りがなされている。横位の叩き後、横ナデと弱い指オサエが行われているが、花立Ⅱ遺跡の軒平瓦Ⅱのようなクリアな面取りではない。瓦当部凹面に荒い布目が残るが瓦当面には布目は残らない。また、瓦当部両端上部は面取りがなされており、瓦当文様としての共通点は少ないようである。

第2図-11・13は、法勝寺域北側の岡崎遺跡出土瓦である。瓦当裏面に粘土の充填がなくほぼ直角に折り曲げられている（13は顎が浅いタイプである）。布目が瓦当面に連続している点で軒平瓦Ⅱと類似するが、粘土補充がないこともあり瓦当裏面の横叩きがみられない。3つの丹波系瓦を比較すると、花立Ⅱ遺跡の軒平瓦Ⅱは、型式的には第2図の9の瓦と11・13の瓦の間に位置付けられるのではなかろうか。

瓦当裏面の叩きは丹波産軒平瓦の特徴とされるが、軒平瓦Ⅱの場合、瓦当裏面に横位の縄叩きが行われていない。粘土補充があるのに横叩き痕跡がみられない理由として次の論考が示唆的である。森下 1984 は、丹波産瓦には篠窯跡群と園部窯跡群の製品があり、実態が明らかではない園部窯跡群から採集した軒平瓦・

平瓦について考察を行っている。軒平瓦はすべて折曲技法で類例が円勝寺跡で見られるが、瓦当裏面に丹波独自の縄叩き調整が見られる。しかし、園部窯跡群のものは並行叩き調整の後、ナデが多用される調整方法をとる。明らかに異なった工人によるものであり、この種の瓦当文様をもつ軒平瓦は、篠窯跡群・園部窯跡群ともに生産されたと推測できるが、調整方法からみると明確に区別されると述べている。森下 1984 の論考に従えば、軒平瓦Ⅱは園部窯跡群の製品に類似する可能性を考えることができる。

## 6 軒平瓦Ⅲ：唐草文系軒平瓦について

### （1）瓦当文様について

軒平瓦Ⅲとした唐草文系と明確に分類できるのは1点（破片）のみであり、全体の文様構成は不明とせざるを得ない。残存部で推計すると瓦当面の縦の長さは5cm以上となることから、本来は軒平瓦Ⅱと同程度のサイズの瓦と考えられる。文様の全体像は、左右に細く優美に伸びる蔓と簡略化された宝相華の花文が描かれていると考えられ、軒平瓦Ⅱと類似する均整宝相華唐草文系の軒平瓦の可能性も考えられる。尊勝寺創建瓦の中にある丹波系の偏行唐草文の一部を反転させたような文様にも見えるが、残存する文様から系譜を検討するのは難しいようである。

### （2）瓦当部成形技法について

軒平瓦Ⅱと同様、丹波系の折曲技法による成形である。軒平瓦Ⅱと異なるのは、瓦当裏面に粘土が補充されず、ほぼ直角に折り曲げられていることである。いわゆる薄顎タイプの折曲技法である。技法的に類似する瓦は岡崎遺跡で出土している軒平瓦である（図2図-11・13）。いずれも唐草文系の文様であるが、瓦当面上部に折り曲げた際の布目が残る。凹面は縦方向の縄叩きが施されるが、瓦当裏面は横ナデにより縄目が消されている。瓦当部下部にも縄目叩きの痕跡が残る。瓦表面が灰色で内部が灰白色を呈すること、胎土が花立Ⅱ遺跡出土の瓦に似ている。瓦当部成形技法としては、軒平瓦Ⅱよりも軒平瓦Ⅲの方が新しく、第2図11・13に近い型式の瓦であると考えられる。

## 7 まとめ：瓦の系譜と年代

花立Ⅱ遺跡出土瓦は、平安京とその周辺部出土の瓦と比較・検討したところ、山城系の瓦と丹波系の瓦に類似することが分かった。軒平瓦は、文様と接合式の

技法から山城系の瓦と類似し、軒平瓦は主に文様と瓦当部成形技法から山城系と丹波系の瓦と類似する。

花立Ⅱ遺跡の瓦には2つの系譜が存在するが、それは出土状況と関連する遺構からみて、時期差ではなく、同じ時期に造られ同じ時期に廃棄された2つの系譜の瓦と考える方が自然である。軒丸瓦は11世紀後半の要素が強いが、森ヶ東瓦窯跡の影響が12世紀初頭まで及ぶという論考もあり、少し幅をもって考えることができる。軒平瓦Ⅰは、文様的には11世紀第4四半期以降と考えられ、瓦当部成形技法としても同様の時期が想定できる。軒平瓦Ⅱは、文様的に新しい要素があるが、瓦当部成形技法としては11世紀第4四半期から12世紀初頭の時期が想定できる。同じ調査区から出土した瓦としては、相互に矛盾のないものであり、花立Ⅱ遺跡の瓦の年代は、11世紀第4四半期から12世紀初頭と推測することができる。山城産・丹波産の違いはあるが、平安京東部の白河地区、特に法勝寺跡周辺で出土した瓦に共通点を見出すことができる。

次に、使用する側からの年代を考察してみる。藤原清衡の平泉移転時期について、『吾妻鏡』文治五年9月23日条に「清衡、(中略)去ぬる康保年中、江刺郡豊田館を岩井郡平泉に移して宿館となす」とある。ただし、康保年中は964～968年であり時代が合わないことから、嘉保年中(1194～1095年)か康和年中(1099～1103)のいずれかとされてきた。一方、樋口2008は陸奥守藤原基頼との関係を重視して長治元年～2年(1104～1105年)としている。居館の移転とすれば、新たな居館の建設期間が必要であり、江刺郡豊田館から家臣や農民の移転も必要とされただろう。移転期間を含めて考えれば、平泉移転時期は11世紀末から12世紀初頭と推測することができる。

瓦の年代は、使用時期の想定から、11世紀末から12世紀初頭と絞り込むことができた。瓦は清衡が平泉に居館を構えた直後に造られたものと考えられる。さて、『吾妻鏡』「寺塔已下注文」には、中尊寺は「清衡管領六郡之最初草創之」とあり、清衡が奥六郡主として公認された後、中尊寺が造営されたとする。中尊寺等の寺院を造営する目的で平泉に移転し、平泉移転が奥六郡主として公認された結果とすれば、平泉移転後、直ちに造営が開始されたことが推測できる。

しかし、『吾妻鏡』「寺塔已下注文」にあるとおり、中尊寺は関山に、①一基の塔→②多宝塔→③釈迦堂→④両界堂→⑤二階大堂・・・と順次堂宇が建立されたも

のであり、造営は長期に及び、金色堂の建立が天治元年(1124年、木材の伐採年代1114～16年)、「中尊寺落慶供養願文」の日付けが天治三年(1126)3月24日であるので、20年(以上)の間間々と造営が行われたことが考えられる。位置的なことを含め、花立Ⅱ遺跡の瓦は最初期の中尊寺域の建物に用いられていたとは考えにくいのではないかと。瓦を用いた花立廃寺の造営は、清衡が平泉に移転した直後、中尊寺造営と並行して行われた可能性が考えられる。

## 8 花立Ⅱ遺跡の瓦の製作者

山城系と丹波系の両方の要素をもつ花立Ⅱ遺跡の瓦を製作したのは誰だろうか。11世紀後半から12世紀前半をピークにして讃岐・播磨・尾張から平安京へ瓦が搬入された。藤原清衡は、平泉に瓦の生産地から瓦を搬入することではなく、在地生産を志向した。当地では瓦生産の伝統はすでに失われ、平安京と同じ瓦を生産するためには、平安京搬入瓦を生産した瓦屋から工人を招く必要があった。その中で、山城・丹波の瓦工人が平泉に赴き、窯を築き、瓦の製作を行い、建物の屋根に瓦が葺かれる作業を見届けた後、それぞれの国に帰還したのだろう。

当時、瓦工人は国衙に支配されていたため、一時的であっても移動は難しい状況であった。本来的に官窯である山城の瓦屋は国衙支配から比較的自由であったと思われる。国衙支配の強かった丹波の瓦工人が、平泉に赴くことができた理由は不明である。超越的な強い政治力が働いたということであろうか。

山城の工人が山城系の瓦を造り、丹波の工人が丹波系の瓦を造った。上原2010は、法勝寺創建瓦において丹波産と山城産の分業が想定できるとしているが、山城と丹波は距離的に近く相互交流が行われていたと思われる。さらに、上原2010は、丹波国衙が主導した瓦生産は10世紀に中断し、11世紀に新たに場所や系譜を異にして再開されたもので、単なる国衙窯ではなく中央官衙系(山城系)瓦屋に準ずる性格を併せもつとしている。瓦の供給形態とは別に、製作者レベルでは山城と丹波の瓦工人は相互補完的な関係があり、工房と窯を共有しながら生産活動を行ったものと考えられる。もう少し踏み込んで考えるならば、前述のように丹波の瓦工人は園部窯跡群の工人の可能性もある。山城の瓦工人も森ヶ東瓦窯の流れを汲む工人の可能性もある。著名な篠窯でもなく栗栖野瓦窯でもない、少

し傍流の瓦窯から工人が派遣されてきたのではないだろうか。

平泉において、瓦製作の痕跡として明らかになっているのは、鈴沢瓦窯跡だけである。鈴沢瓦窯跡の調査では2基の瓦窯跡が検出されている。東側の窯跡で巴文・剣頭文系の瓦が焼かれたが、西側の窯跡については不明である（平泉町教委1974）。観自在王院跡東側の斜面地である鈴沢瓦窯跡周辺は、区画整理・開田等により地形改変が行われている。本来的には、鈴沢瓦窯跡付近の斜面地に花立Ⅱ遺跡の瓦を焼いた瓦窯が存在した可能性が考えられる。

## 9 花立Ⅱ遺跡出土瓦を用いた建物について

最後に、花立Ⅱ遺跡出土瓦を用いた建物について少し検討してみる。瓦の使われ方は総瓦葺きか、葺棟かの両者の可能性があるが、軒瓦と平瓦等との量比（軒瓦10点：丸瓦・平瓦2,000点）から総瓦葺きであったと考えられる。瓦葺きのⅠ期建物の次の建物であるⅡ期建物Bの柱穴底に、A建物の完形の平瓦が用いられていたことも総瓦葺きを示唆する。

さて、富島2000は中尊寺・毛越寺の有する大規模な寺院組織が、花立廃寺跡周辺にまで及んでいた可能性を指摘し、平面形態は平泉最大級であることから、花立廃寺跡を『吾妻鏡』「寺塔已下注文」で記される中尊寺の釈迦堂、あるいは毛越寺の吉祥堂・千手堂に比定している。花立廃寺跡は金鶏山を背景にした寺院跡であり、前述のように関山に展開した中尊寺と直接結びつけることは疑問が残る。12世紀のある時期まで、花立廃寺跡の周辺は中尊寺・毛越寺に次ぐ堂塔が立ち並んでいたのではなかろうか。

現在の平泉文化遺産センターの場所でも12世紀の建物跡が確認されている。花立廃寺跡と花立Ⅰ遺跡のⅠ期建物跡の角度が一致し、少なくともこの角度に沿うものが3棟あり、この範囲が12世紀の寺院の範囲と推定することができる。花立廃寺跡からは軒瓦が出土しないことから、棟瓦として使用されたと推測される。総瓦葺きの花立Ⅱ遺跡Ⅰ期建物Aは、東面する本堂南側の付随的な建物と考えられる。花立廃寺跡は、平泉最大規模の仏堂跡であるが基壇が設けられていない。中尊寺や毛越寺の堂跡は基壇上に礎石が据えられるが、花立廃寺跡の礎石は造成された粘土上に礎石が据えられている。12世紀初頭、まだ仏堂は在地の工法で造られており、平安京の文化導入という点で、象徴

的な存在である瓦が先行したということなのかもしれない。

総瓦葺きとすれば、12世紀平泉における唯一の瓦葺き建物の記述である『中尊寺落慶供養願文』の「二階瓦葺経蔵一字」との関連が考えられる。供養願文伽藍が中尊寺伝大池跡と推定されていることから可能性は低いだが、当時火災から経典を守るため、経蔵に瓦を用いることが一般的であったことを考慮すると、花立廃寺跡に付属する経蔵的な施設と考えるのが妥当ではないかと考える。

清衡が瓦を用いた契機と目的はどのようなものだったのだろうか。樋口2008は、藤原清衡が寛治七年（1093）か嘉保元年（1094）より4～5年ほどの間在京生活を送ったと推測している。清衡が在京生活を送ったという確実な証拠はない。しかし、清衡が12世紀初頭に、平安京から遠く離れた平泉の地で、院政期の仏教文化の粋として完成度の高い造寺事業をなした事実を考えれば、平安京を見ていないこと自体が不自然と考えるべきであろう〔註8〕。

清衡が在京生活を送っていた時期、実際に見た最先端の寺院は法勝寺であったと考えられる。東国から逢坂の関を越えた人々を圧倒するのが法勝寺九重塔の威容であった。八角九重塔・薬師堂・八角堂の落慶供養が行われたのが永保三年（1083）である。寛治五年（1091）に地震があったが、八角九重塔の優秀な地業により倒壊は免れた。承德2年（1098）に九重塔の修理が完了し、康和四年（1102）に尊勝寺が営まれている〔註9〕。天喜六年（1058）に全焼した法成寺だが、藤原頼通が再建した姿を仰ぐことも可能だったと思われる。

清衡を都に導いた人物が他ならぬ源義家とすれば、白河天皇と義家の間で個人的関係が形成されていた頃（1090年代）に、在京生活が可能になったのではないだろうか〔註10〕。法勝寺はランドマークであり権力を示す存在であったが、回廊の中に入り本尊を拝するのは特別に許された人物のみであった。山岸1998は、法勝寺の性格について、法勝寺には当初、三綱と院の関係者を含む俗人の実務者以外は常駐せず、特に僧侶は普段はほとんど住んでいなかった。独自の僧侶組織がなく国家的な法会の時だけにぎわう姿は12世紀初頭まで続いたらしいとしている。清衡の在京期には、法勝寺は象徴ではあったが開かれた寺院ではなかったようである。

法勝寺という理想的なモデルを見た清衡が、それに比肩する寺院を建てようと志したことは想像に難くない。八角九重塔は技術的に不可能であることは分かりきっていたが、同じような瓦を用いることは希望したのではないか。白河天皇との知遇は受けたにせよ公的なものではない状況で、山城・丹波の瓦工人を平泉に招くことがいかにして可能だったのか。少なくとも強い管理下になかった傍流の瓦工人が山城と丹波に居たということかもしれない（あるいは何らかの政治力が作用したのかもしれない）。清衡には、平泉に戻り、藤原氏の一員として撰閥家との公的な関係を取り結ぶ必要があった。法勝寺の甍を仰いだ時、清衡は心の中で夢の実現を志したのではないか。

以下、想定されることを述べて結びとしたい（あくまでも仮説であり妄想と言ひ換えてもよい）。平泉の地に「法勝寺」を建てる際に選ばれたのが、金鶏山の東麓の台地であった。これが花立廃寺であった。金鶏山の東麓の地形は、東山から階段状に、テラスのように造成されていった六勝寺を想起させる。山麓の最高度の造成地に法勝寺が建てられたが、この在り方が花立廃寺跡によく似ている。八角九重塔の代わりが金鶏山だったのかもしれない。花立廃寺跡に係る記録がなく、文治五年（1189）段階にはすでに存在しなかった可能性があるが、それは法勝寺同様、僧侶組織がない法会のための寺院であったからだろうか。寺院としての痕跡の少なさは、衣川の長者ヶ原廃寺の状況に似ているともいえる。

二条大路末の東の突きあたりに法勝寺の西大門があった。二条大路は平安京の実質的なメインストリートであり、東国に抜ける重要な幹線道路であった。これも花立廃寺跡の立地と類似している。平泉のメインストリートは毛越寺南大門跡を起点とする東西大路であった。しかし、これは2代基衡が整備したものであり、12世紀初めは達谷窟から毛越寺の場所を経て金鶏山の麓を経由して、関山に至るルートがメインストリート（奥の大道）であったと考えられる。当時、道路を子午線に合わせ直線的に造ることは考えられていなかったようである。花立廃寺跡と花立溜池の間は現在も道路で分断されているが、実は奥の大道は花立廃寺南門と北門を貫通していたのかもしれない。清衡は関山に中尊寺を建てる際にも同様の立地で寺院を建立し、2代基衡は奥の大道沿いに毛越寺を建立した。

清衡の花立廃寺と中尊寺の関係は、白河天皇が法勝

寺を建立し、白河上皇が鳥羽殿を造営したことに似ているのではなかろうか。法勝寺は天皇の御願寺であり、鎮護国家を祈る公的な寺院として位置づけられる〔註11〕。一方、鳥羽殿は院の御所が営まれる「私的な」空間であり、浄土思想を背景としていた。花立廃寺は当初公的な寺院として営まれたが、公的・私的な両面をもつ天皇の御願寺（実質的には白河院のための寺院）として中尊寺が建てられたと推測する。

六勝寺が甍を競った白河地区には当初は院御所は存在しなかった。覚円の坊舎地に白河南殿が建てられたのは嘉保二年（1095）と遅れる。鳥羽離宮は院御所（南殿）が先行し、南殿付属の御堂として証金剛院が完成する康和三年（1101）まで寺院の建立が行われなかった。鳥羽殿（鳥羽離宮）は後院として出発したこともあり、白河上皇の譲位後の御所として当初から計画された遊興の場であった。中尊寺と鳥羽殿は同時代的な存在であったと推測される。

清衡は、その後、大治元年（1126）に『中尊寺落慶供養願文』として、三間四面桧皮葺の釈迦堂や三基の三重塔、金銀字交書一切経を納めた瓦葺二階経蔵等からなる伽藍一区を白河法皇に奉献した。平泉において最初の本格的な寺院が、花立廃寺であったと考えられるが、長く存続することはなかった。文治五年（1189）にはすでに人々の記憶からも薄れつつあった。花立廃寺跡を中心とする伽藍一区は仏都平泉の先駆けの文化であったが、僧侶組織を背景としない寺院として、傑出した一人物の夢のなかで完結し、その後は金鶏山のみ形を残した幻の寺院であったのかもしれない。

## おわりに

花立Ⅱ遺跡の瓦の観察については、平泉文化遺産センターの菅原計二氏に大変お世話になりました。また、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の上村和直氏には瓦の観察に御配慮いただいただけでなく、瓦の製作技法等について貴重な御助言をいただきました。改めて感謝申し上げます。

## 〔註〕

註1：花立Ⅱ遺跡13次調査区で2,000点を越える瓦片が出土したが、過去の平泉遺跡群の調査で出土した瓦片と比べると格段に多い量である。しかし、出土量のみで瓦の現地生産と判断することはできない。同じ時期、播磨や讃岐から何十万枚の瓦が平安京に運ばれた。遠隔地というハンデはあるにせよ平泉の立地を考えれば、北上川の舟運があり難しい問題ではない。平安京の場合、山

城官窯系の製品を除けば、瓦は受領の「成功」による産物であり、交易品ではなかった。興福寺等の撰閥家との繋がりによって生産された南都系瓦は例外的だが、受領の管理下にあった瓦屋からの購入は困難であったと考えられる。花立Ⅱ遺跡の瓦の胎土・焼成は、播磨や讃岐などの瓦の生産地の製品と類似しない。播磨や讃岐のように瓦陶兼用窯産と推測される製品は、須恵質で焼成が堅緻である。むしろ、胎土・焼成の点では、鈴沢瓦窯産と推定される柳之御所遺跡等の巴文・剣頭文系の瓦と共通する。12世紀平泉において、奥州藤原氏は製品の購入ではなく、工人を招いての現地生産を志向したとみられ、渥美系の陶器窯（花立窯跡）、巴文・剣頭文系の瓦窯（鈴沢瓦窯跡）、銅鐘製作の工房の存在（白山社遺跡の梵鐘製造遺構）などから、平泉に工人を招き現地生産を行った痕跡が発見されている。奥州藤原氏が在り地生産にこだわった理由は、技術の保有が重要であったからと思われる。技術の保有自体が奥州藤原氏の特権であり、「北の都」として各地に平泉発の製品をもたらすことが、奥州藤原氏の権力を示すことと考えられたのではないだろう。

註2：平安京における「後期の瓦」について、上村1994は次のように述べている。11世紀後葉から12世紀中葉にかけて、平安京では造寺・造御所活動が活発に行われた。それらは造寺国の国司（受領国司）により行われた。これら国司は、造営を請け負った功により、選任・重任や加階を受ける「成功」を目的としていた。これは「造寺国制」と呼ばれ、法勝寺や尊勝寺・白河南殿が造られる。12世紀後半の後白河院政期は「知行国制」の確立により、寺領荘園が増大し、寺院・御所の造営活動が減少する。保元二年（1157）の内裏修造をもって「造寺国制」は終了し、その後の寺院・御所の造営は寺領荘園を経済的基礎として営まれるとしている。

註3：森ヶ東瓦窯跡出土の軒丸瓦との文様の類似性は、上原2000・2001でも指摘している。

註4：11世紀後半（11世紀中葉から12世紀初頭）の平安京の瓦は、地方産の瓦と官窯系（山城系）の瓦が併存する状況であった。植山1990は、この時期の平安宮周辺の各造瓦所（山城官窯系瓦窯）について次のように述べている。

ア 森ヶ東瓦窯跡：瓦当文様中に「下」の文字が付された軒丸瓦がある。「下」は造瓦所名の一部と推定されている。10世紀に開窯した平安中期の官窯の一つで、緑釉瓦の生産も行っていった。造瓦技法に次のような顕著な特徴がある。①軒丸瓦：接合式（通常の瓦当部に丸瓦を接合する方法）であること、②瓦当面に離れ砂が目立つこと、③胎土は砂の混入が少なく粘土の練りが十分でなかったのか、細かい縞模様のような状態を呈しているものが多いこと、④焼成は青灰色を呈し須恵器質に堅く焼けたものと、かなり軟質焼成のものとの両極端に分かれること。

瓦当文様は他の官窯製品と共通し、官窯の体制に組み込まれていた。10世紀段階は平安宮を中心に瓦を供給し、11世紀代には平安宮だけでなく、宮外の平安京内や法勝寺などに瓦を供給していた。森ヶ東瓦窯跡の製品は、大阪府高槻市の群家川西遺跡からも出土している。

イ 今熊野池田瓦窯跡：大谷高校敷地内から発見された瓦窯である。「右」や「右坊」などの文字瓦が出土しており、修理職所属の瓦屋と推定されている。軒丸瓦は一本造りである。

ウ 大宮河上瓦窯跡：「河上」や「川」を示す文字瓦から命名された。軒丸瓦は一本造りで、胎土は粗い砂粒や小石を含み、全体として粗雑な感じのする製品である。

エ 大宮北山ノ前瓦窯跡：西賀茂社瓦窯の南側に当たるが、平安中期に改めて開窯された造瓦所と推定される。森ヶ東瓦窯と同範瓦が採集されている。

オ 栗栖野瓦窯跡：軒瓦は平安前期から後期に至るまで多くの種類があるが、中期段階の瓦には不明な点が多い。

カ 安井西裏瓦窯跡：植山1990段階では発見されていないが、森ヶ東瓦窯跡の東側で新たに発見された瓦窯（1997年）。

植山1990は、上記ア～カの山城系瓦屋で軒丸瓦を「接合式」で製作しているのは、森ヶ東瓦窯（+安井西裏瓦窯）の製品のみとしている。

註5：讃岐守高階泰伸の造進については、『扶桑略記』応徳三年（1086）10月20日条に、「公家近來九条以南、鳥羽山莊新建後院、凡ト百余町疋、近習卿相侍臣地下雑人等、各賜家地、營造舎屋、宛如都遷、讃岐守高階泰伸、依作御所已蒙重任宜旨」とある。

註6：山城系の瓦窯群については、①「栗栖野瓦屋」、②「小野瓦屋」（小野瓦窯）、③三縁寺瓦窯跡、④芝本瓦窯跡、⑤上ノ庄田瓦窯跡、⑥森ヶ東瓦窯・安井西裏瓦窯などが知られているが、著名な①「栗栖野瓦屋」には、ア「福枝」（栗栖野瓦窯）、イ「西幡枝」（円通寺瓦窯）、ウ「南ノ庄田」（南ノ庄田瓦窯）がある。「福枝」が平安時代全時期にわたり、「西幡枝」・「南ノ庄田」が平安後期のみの操業である。①～④が洛北幡枝地区に所在することから山城幡枝瓦窯群と総称される場合がある。⑤は、西賀茂地区に所在する平安前期の瓦窯であり、⑥は前述のように太秦地区に所在する平安中期の瓦窯である。

註7：法勝寺阿弥陀堂創建瓦としているのは、法勝寺跡の西隣りの調査地からの出土であることから、丹波守藤原顕季が担当した阿弥陀堂建立に係わる瓦の可能性が高いと考えられたものである。位置的には京都市美術館敷地内の円勝寺跡に相当する（ただし年代的にみれば円勝寺建立以前の瓦である）。ちなみに、平成23年度京都市動物園内の発掘調査で、キリン舎東側から阿弥陀堂跡とみられる版築層が発見されている。阿弥陀堂創建瓦かは不明だが、状況からみて法勝寺建立期の11世紀第4四半期頃の製品と考えられる。

註8：樋口2008は、『中右記』嘉保元年（1094）5月4日条に「兵衛尉清衡」なる人名がみえ、のちにその平清衡が左衛門権少尉に任じられたことから、この「清衡」が藤原清衡本人である可能性が高いとしている。嫡妻北方平氏から平氏姓を称して在京・仕官していた可能性があり、この時に大江匡房の知遇を受けたとしている。大江匡房は白河天皇の東宮学士を務め、白河天皇期に公卿となり最高位は二位の権中納言に昇進した学者であり、『後三年後記』や『古今著文集』によれば、源義家の兵法上の師でもあった。清衡の在京時代、義家を通じて白河天皇との関わりをもっただけでなく、当代一流の学者から最新の仏教文化を受け入れていた可能性も考えられる。

角田1987は、御館のうち誰かが上洛したことを証明する史料は存しないけれども、様々な観点から考察してみると、御館たち、少なくとも清衡が一・二度上洛したことは疑いがない。清衡は後三年合戦の後、程なくして源義家などを頼って上洛した。清衡の上洛なくして、都の地形に似た土地を新首邑の地に求めるという発想は生じえなかった。『中右記』の「兵衛尉清衡」と同一人物かは即断できないが、彼が短期間在任した後、散位前兵衛尉という資格で故郷に錦を飾ることは望ましかったに違いない。いずれにせよ、新たな平泉という地に王朝文化の華を咲かそうと決意した背後には、花の都を親しく見、絢爛たる文化に陶酔した彼自身の体験が確実に存在したものである、としている。

註9：法勝寺の造営は、承保二年（1075）6月13日に開始された。その地にはかつて白河殿と呼ばれた撰閥家の別邸があった。承暦元年（1077）12月18日、完成供養の儀式が白河天皇・陽明門院・中宮賢子以下の臨席のもとにぎにぎしく挙行された。当日供養されたのは金堂・講堂・五大堂・阿弥陀堂・法華堂の各堂社であり、金堂付属の東西回廊、鐘楼、経蔵、南大門などもやがて完成した。発掘調査によると、金堂跡は七間×二間の東西に長い遺構で、その周囲を廂一間と裳階一間が巡っていることがわかり、文献資料の七間四面の記述と一致する。八角九重の塔はこれらに遅れて永保元年（1081）10月27日に心柱が建てられ、2年後の永保三年（1083）10月1日に薬師堂・八角円堂とともに完成した供養が行われた。法勝寺は天王寺式の伽藍配置であり、古代的な、あるいは復古的な景観を備えた鎮護国家的な寺院といわれる。そして、以後に建立される白河地区の寺院には、「勝」の文字が使われたことにより白河地区の寺院群は六勝寺と呼ばれた。

藤原道長が造営した法成寺は、道長の別名「御堂関白」あるいはその日記「御堂関白記」の名前の由来になるなど、道長と深いつながりをもつ重要な寺院であった。法成寺は寛仁四年（1020）

創建当初、出家した道長が居住する僧坊（寢殿）と阿弥陀堂、池つき庭園を有した浄土教的な寺院である無量寿院として出発した。しかし、道長は住房としての性格をもった寺を、治安二年（1022）に金堂と五大堂を完成させて以降、金堂を中心とする本格的な伽藍を備えた法成寺へと転回させていった。法勝寺は名前も似ている壮大な法成寺を模倣して造営された寺院であるが、金堂・講堂以下主要堂舎から後れること6年にして完成させた八角九重塔の存在こそが白河天皇（法皇）を象徴するものと考えられる。

註10：11世紀後葉段階で、白河天皇と清衡のつながりが存在したとすれば、源義家を介したものと考えられる。藤原氏の一員とはいえ陸奥国在住の一豪族と最高権力者が公的に関係を持ちうることなどありえず、あくまで私的なものに留まったと考えられる。白河天皇は寺社勢力への対応として、源義家を院殿上人としてその武力育成を図ろうとしたが成功せず、その後桓武平氏（平正盛）を院北面に登用し、結果的に武士の成長を促すことになった。美川2003は、承徳2年（1098）に源義家が院御所への昇殿を許されるかなり以前から、白河天皇と義家は個人的に近い関係にあったと推測している。永保元年（1081）白河天皇の石清水への行幸の際に義家が護衛役を果たしたのを契機に、天皇との深い個人的関係が生まれたとし、後三年合戦で貴族からの評判が芳しくない義家を憚って正式な昇殿が遅れたのではないかとしている。中央の貴族にとって義家は、後三年合戦時に中央への貢納を怠った人物と受取られていた。

『中尊寺落慶供養願文』には、中尊寺は白河院に捧げられた御願寺であると書かれている。「奉祈禪定法皇（白河法皇のこと）、蓬萊殿上、日月之影鎮暹、功德林中、霧露之気長霽、金輪聖主玉衣無動、太上天皇（鳥羽天皇のこと）寶算無疆、國母仙院麻姑比齡、林廬桂陽松子伴影、三公九卿武職文官、五幾七道萬姓兆民、皆樂治世、各誇長生、為御願寺、長祈國家區々之誠・・・照弟子之中誠、佛經合力添法皇之上壽、弟子（清衡のこと）生涯、久浴恩徳之海、身後必詣安養之郷、及至鐵圍砂界」

註11：丸山2006は、中尊寺は白河法皇の御願寺と位置付けた上で、「鎮護国家大伽藍一区」は、洛南鳥羽や洛東白河に造営された王家の御願寺とは異なるとしている。御願寺造営は、清衡のその地域での地位向上における権威付けの役割を果たした。王家にとっても、地域における御願寺造営は、洛南鳥羽・洛東白河以外で王家の安泰や鎮護国家の仕事を催すことになり、王権の正統性を地域においても示すことになった、としている。「鎮護国家大伽藍一区」は、以下の3点において、洛南鳥羽や洛東白河に造営された王家の御願寺とは異なる。第1は、白河法皇の御願寺でありながら、藤原清衡自身のこと願文中に読み込まれていること、第2は、「弟子正六位上藤原朝臣清衡敬白」とあるように、陸奥国司でない正六位上の藤原清衡が「大檀那」として造営したこと、第3は、貢馬や奥羽の撰閑家領荘園の年貢納入といった撰閑家との結びつきから、藤原頼通によって造営された法成寺釈迦堂をモデルとしたと考えられることである。つまり白河法皇御願寺「鎮護国家大伽藍一区」は、藤原清衡が白河法皇のために造営した御願寺であるといえる。王家にとって、洛南鳥羽や洛東白河だけでなく、東の境界ともいえる奥州平泉において鎮護国家を祈る御願寺を造営することは、さらに作善を積むことにつながるものであり、中世日本社会における自己の王権の正当性を示すことにつながったと思われる。一方、在地勢力平泉藤原氏にとって白河上皇の御願寺を造営することは、中尊寺経蔵別当領骨寺村の開発や陸奥国司との対立において、王家の権威を背景として優位に立つことができたと思われる。

### 〔参考・引用文献〕

岩手県教育委員会 1951年：『平泉花館遺址』岩手県文化財調査報告書第1輯  
上原真人 1978年：『古代末期における瓦生産体制の変革』『古代研究』13・14号（財）元興寺文化財研究所

上原真人 1980年：『十一・十二世紀の瓦当文様の源流』（上）（下）『古代文化』32・5・6  
上原真人 2000年：『紙上報告／平安京からみた花立Ⅱ遺跡出土軒瓦の年代』『平泉文化フォーラム／瓦からみた平泉文化』平泉町・平泉町教育委員会  
上原真人 2001年：『秀衡の持仏堂－平泉町柳の御所遺跡出土瓦の一解釈－』『京都大学文学部研究紀要』第40  
上原真人 2010年：『撰閑・院政期の京都における丹波系軒瓦の動向』『佛教芸術』308号  
上村和直 1994年：『4. 後期の瓦』『平安京提要』角川書店  
上村和直 2007年：『平安宮の衰微』『研究紀要第10号－（財）京都市埋蔵文化財研究所創立30周年記念号－』（財）京都市埋蔵文化財研究所  
植山 茂 1979年：『平安京の瓦の布目』『日本古代学論集』古代学協会創立25周年・平安博物館開設10周年記念 古代学協会  
植山 茂 1990年：『11世紀後半の平安京所用瓦』『京都文化博物館紀要／朱雀』第3集 京都文化博物館  
小野寺麻耶 2002年：『国見山廃寺跡出土瓦の検討』『北上市立埋蔵文化財センター紀要』第2号  
金子 智 2013年：『みちのくの瓦／東北と三州をつなぐもの』高浜市やきものの里かわら美術館平成24年度特別展図録  
鎌田 勉 1994年：『柳の御所遺跡出土瓦からの一考察－平泉の瓦成立の系譜と年代及び使用形態について－』『財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XIV』  
鎌田 勉 2006年：『柳の御所遺跡出土瓦についての再検討～主に瓦の年代と使用方法について～』『岩手県立博物館調査研究報告第23号』岩手県立博物館  
鎌田 勉 2011年：『第5章まとめと考察／豊田館の擬定地について』『人首川流域における古代末期遺跡調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第26冊  
鎌田 勉 2014年：『平泉町花立Ⅱ遺跡出土の瓦について（その1）』『岩手県立博物館調査研究報告第31号』岩手県立博物館  
木村捷三郎 1996年：『木村捷三郎収集瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所  
京都市文化観光局 1990年：『鳥羽離宮跡発掘調査概報』  
京都市文化市民局 2005年：『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局  
工藤美和子 2013年：『仏界の荘厳－法勝寺は何のために建てられたのか』洛中周辺地域の歴史の変容に関する総合的研究『佛教学総合研究所紀要2013(2)』  
久保智康 2006年：『中尊寺をかざる花、宝相華』中尊寺寺報『関山第12号』中尊寺  
（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2014年：『延勝寺跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-1  
近藤喬一 1985年：『瓦からみた平安京』教育社歴史新書〈日本史〉40  
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006年：『柳の御所跡－閑遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集  
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997年：『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集  
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000年：『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集  
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年：『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』（尊勝寺跡）  
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年：『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡）  
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年：『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』（尊勝寺跡・仁和寺院家跡）  
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年：『昭和62年度京都市埋蔵

- 文化財調査概要』(尊勝寺跡4)
- (財)京都市埋蔵文化財研究所1993年:『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』(尊勝寺跡・岡崎遺跡、鳥羽離宮跡第127次調査)
- (財)京都市埋蔵文化財研究所1995年-1:『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊
- (財)京都市埋蔵文化財研究所1995年-2:『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要(Ⅲ白河街区跡/最勝寺跡・岡崎遺跡)』
- (財)京都市埋蔵文化財研究所1996年:『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(平安京左京一条三坊)
- (財)京都市埋蔵文化財研究所1998年:『南ノ庄田瓦窯跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊
- (財)京都市埋蔵文化財研究所1999年:『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(安井西裏瓦窯跡)
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2002年:『鳥羽離宮跡Ⅰ-金剛心院跡の調査-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2003年:『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財調査報告2002-7
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2004年:『平安京右京三条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財発掘調査概報2004-6
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2005年-1:『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2005-4
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2005年-2:『平安京左京二条二坊十町(高陽院)跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2005-7
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2007年:『法勝寺』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2007-9
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2008年:『平安京左京五条三坊九町跡・鳥丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2008-10
- 杉山信三・岡田茂弘1962年:『尊勝寺跡発掘調査報告』『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡』奈良国立文化財研究所学報第11冊
- 角田文衛1987年:『平泉と平安京-藤原三代の外交政策』荒木伸介・角田文衛他『奥州平泉黄金の世紀』とんぼの本/新潮社
- 津々池惣一1996年:『平安時代後期の瓦-巴文瓦の様相について-』『研究紀要第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所
- 富島義幸2000年:『平泉・建築とその空間』『平泉文化フォーラム/瓦からみた平泉文化』平泉町・平泉町教育委員会
- 樋口知志2008年:『藤原清衡論(上)(下)』『アルテス・リベラレス』岩手大学人文社会学部紀要第82号・第83号
- 平泉町教育委員会1974年:『鈴沢地区緊急発掘調査(略報)』
- 平泉町教育委員会2000年:『伽羅之御所跡第14次』『平泉遺跡群発掘調査略報』岩手県平泉町文化財調査報告書第75集
- 平泉町教育委員会2010年:『花立Ⅰ遺跡第29次』『平泉遺跡群発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第114集
- 藤島亥治郎1961年:『平泉-毛越寺・観自在王院の研究』東大出版会
- 藤島亥治郎1995年:『平泉建築文化研究』吉川弘文館
- 平安博物館編1977年:『平安京古瓦図録-図録篇-』雄山閣
- 本澤慎輔2000年:『平泉出土の瓦』『平泉文化フォーラム/瓦からみた平泉文化』平泉町・平泉町教育委員会
- 前川佳代2001年:『平泉の苑池-都市平泉の多元性-』『平泉文化研究年報第1号』岩手県教育委員会
- 前田義明1994年:『3.中期の瓦』『平安京提要』角川書店
- 丸山 仁2006年:『院政期の王家と御願寺-造営事業と社会変動-』高志書院
- 美川 圭2003年:『白河法皇-中世をひらいた帝王-』NHKブックスNo.973 日本放送出版協会
- 美濃口紀子・坂口美智子2011年:『京都市法勝寺跡出土瓦について-熊本博物館所蔵山崎正董古瓦コレクション-』熊本博物館
- 森下 衛1984年:『園部窯跡群採集の古瓦』『京都府埋蔵文化財情報第12号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 矢崎靖子1964年:『岩手県平泉中尊寺伝大池址周辺遺跡出土瓦について』『物質文化』
- 山岸常人1998年:『法勝寺の評価をめぐって』『日本史研究』No.426
- 吉崎 伸2004年:『小野瓦屋-延喜式に記載された瓦屋-』リーフレット京都No.187/2004年8月 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
- 吉村正親1987年:『平安京域出土瓦とその生産-特に院政期を中心として-』『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会